

「地図豆」の地図を広げて街歩き

90-1 赤坂川跡をたどって、荒木町の不思議な路地裏と策（むち）の池へ (10.0km)



荒木町策の池

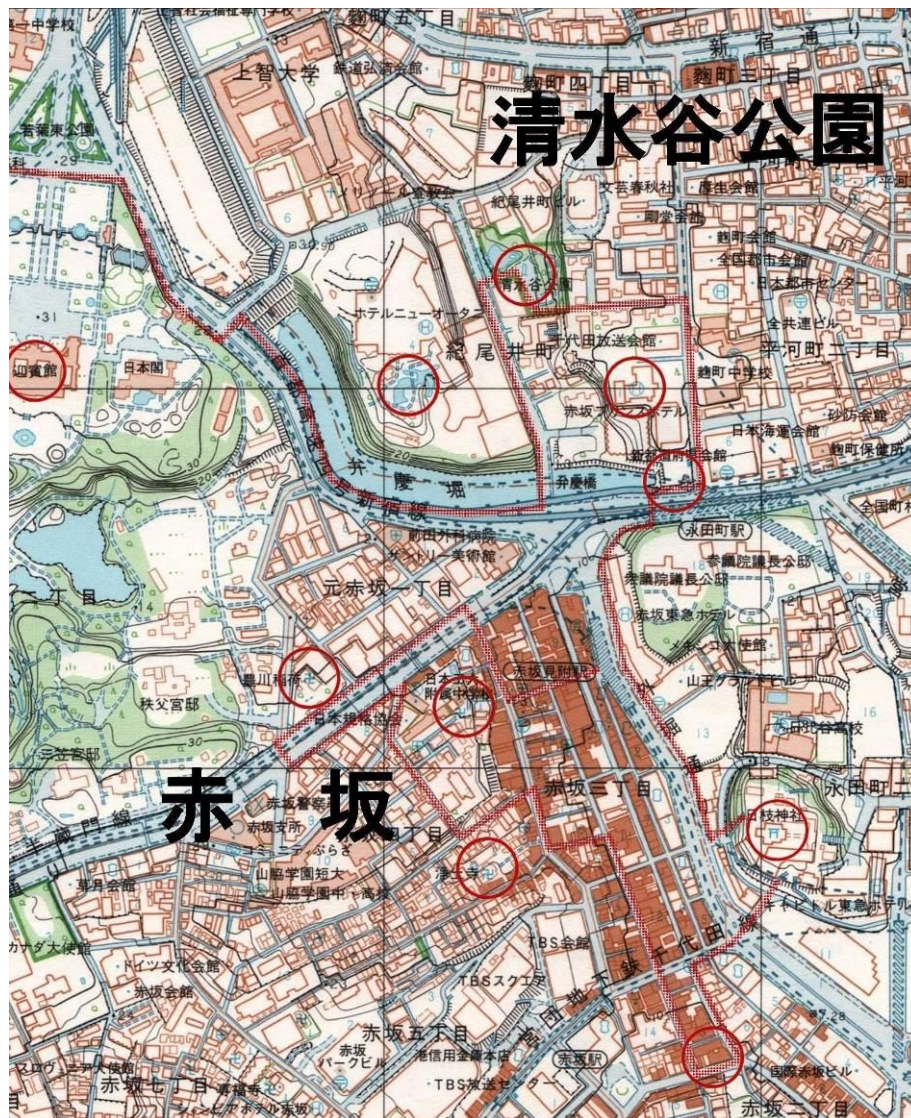
【街歩きの概要】

四ツ谷駅の西から、赤坂御用地を経て赤坂見附、溜池へと流れていた赤坂川跡（鮫川とも呼ばれた下水）を下流から上流へとたどり、峠（分水嶺）の向こうにある荒木町の興味深い窪地を訪ねる。

スタート地点の赤坂見附の街中を縦横にたどり、赤坂門の石垣に刻まれた几号水準点を見たのちは、赤坂プリンスホテル旧館（工事中）やホテルニューオータニの日本庭園にも寄り道する。赤坂川跡の赤坂御用地には入れないから、その北にある豪華な迎賓館をこれもまた柵越しに眺めてから、鮫川橋跡でプレ窪地を見て、赤坂川沿いに上って、服部半蔵墓や四谷怪談お岩ゆかりの稲荷神社などをめぐる。そののちは分水嶺を越えて第一級の窪地である荒木町へと向かう。

【道順】

東京メトロ赤坂見附駅→赤坂不動尊→赤坂豊川稲荷→とらや赤坂本店など赤坂商店街→六地藏の浄土寺→赤坂コリアン横丁→日枝神社→赤坂門几号水準点・史跡赤坂御門跡→赤坂プリンスホテル旧館（工事中）→清水谷公園・江戸水道の石枡・大久保公哀悼碑→ホテルニューオータニ日本庭園→弁慶橋ポート乗り場→迎賓館前→学習院初等科前→鮫川橋地名発祥の碑・赤坂川（跡）→西念寺服部半蔵墓・愛染院塙保己一墓→圓通寺坂→於岩稲荷田宮神社と陽運寺→四谷怪談お岩水かけ観音・消防博物館→荒木町路地裏→策（むち）の池→三栄通り裏→たい焼き若葉→JR 四ツ谷駅



ルートマップ赤坂部分

【街歩き解説】

①豊川稲荷

赤坂見附駅から赤坂不動尊を横目に見て豊川稲荷に向かう。

赤坂豊川稲荷は、北町奉行の大岡越前守忠相が、領地三河に古くから伝わる円福山妙巖寺の鎮守・ダ枳尼天を深く崇敬したことで、忠相の子孫が1828年（文政11）に赤坂一ツ木の下屋敷内にダ枳尼天を勧請したのがはじまりだという。1887年（明治20）に大岡邸が現在の地に移転するとともに移り、妙巖寺が直轄する東京・赤坂豊川稲荷別院となった。もちろん、境内には狐がいっぱいいる。



キツネの豊川稲荷と、なぜかラクダがいる牛鳴坂



一ツ木通り赤坂浄土寺の六地藏・丹後坂近くで

②日枝神社



小ぶりの赤坂コリアン街から鳥居からして豪華な日枝神社へ

赤坂豊川稲荷の後は、とらや赤坂本店から、牛鳴坂、六地藏の赤坂浄土寺を経て、料亭が散在する赤坂商店街などをふらふらしてから赤坂コリアン横丁をたずねたのち、江戸三

大祭の一つ、山王祭が行われることで有名な日枝神社へ向かう。同社は、文明10年（1478年）、太田道灌が江戸城築城にあたり、川越の無量寿寺（現在の喜多院）の鎮守である川越日枝神社を勧請したのに始まるという。立派な鳥居とエスカレータが特徴的な参道を登って、本殿に向かう。

③赤坂見附・史跡赤坂御門跡・赤坂門几号水準点

赤坂見附は、江戸城の「江戸城三十六見附」のひとつ。見附は、主に城の外郭に位置し、外敵の侵攻、侵入を発見するために設けられた警備のための城門のこと。門は明治5年（1872）に撤廃され、現在は石垣の一部が残っている。その石垣に几号水準点が残るが、夏季は夏草に隠されて見えないこともある。



赤坂門几号水準点と内務省地理局の5千分の1地形図に記入された几号水準点
辺りでは日枝神社や浄土寺、紀尾井町喰違門にも記載があるが現存しない。

④赤坂プリンスホテル旧館（工事中）

2007年に「グランドプリンスホテル赤坂」と改称されたのち閉館。同旧館は、韓国皇太子として生まれ、朝鮮併合後には日本の皇族に準じた扱いを受けていた李垕のかつての邸宅として造営された建物である。

保存される旧館は、柵越しに見ることができる。

⑤清水谷公園

ビルの中の道から階段を下りて清水谷公園へ向かう。

紀州徳川家屋敷内の井伊家との境目付近の清水が沸き出ていたことから、付近は「清水谷」と呼ばれたが、現在清水は涸れている。

明治期、当地付近に自宅を構えていた大久保利通が暗殺されるという事件が起きた（紀尾井坂の変 明治11年）。この事件は人々に衝撃を与え、後に暗殺の現場となった当地に

大久保利通哀悼碑が建てられた。また公園内には、麴町通りから掘り出された江戸水道（江戸城に給水された玉川上水幹線）の石柵が残されている。

かつてはデモ集会の場としても知られたところである。



紀伊殿と井伊掃部頭、尾張殿と屋敷が広がる紀尾井坂辺りの「江戸切絵図」



弁慶橋ポート乗り場・清水谷公園の江戸水道石柵

⑥ ホテルニューオータニ日本庭園

江戸城外堀に囲まれた約4万㎡の広大なホテルニューオータニの日本庭園は、井伊掃部頭中屋敷、そして伏見宮邸として400年余りの歴史を有し、東京名園の1つに数えられる。四季折々の花々が咲き乱れ、樹木が濃い木陰をつくる、池泉廻遊式の日本庭園である。街歩きの者は身なりを整えて入園する？



ホテルニューオータニ日本庭園の夏と秋

⑦弁慶橋ボート乗り場

皇居のお濠でボート遊びができるのは、千鳥ヶ淵と弁慶濠の二ヶ所だけ、都心のド真ん中で、のんびりできる不思議な場所だが、きれいな水面は期待できない。また、堀の東側には水辺に並行する遊歩道があるのだが、閉鎖中だった。

⑧迎賓館

迎賓館の建物は、当初東宮御所として1909年（明治42年）に片山東熊の設計により、元紀州藩の屋敷跡（明治6年宮城火災から明治21年の明治宮殿完成までの15年間、明治天皇の仮御所が置かれていた）に建てられ、その後赤坂離宮と改められた。

第二次世界大戦後、赤坂離宮の敷地や建物は国立国会図書館などに使用されていたが、のちに改装されて1974年（昭和49年）3月に、現在の迎賓館が完成した。



（軒丸）瓦に菊の御紋が見える迎賓館東門と迎賓館



ルートマップ四ツ谷部分

⑨鮫川橋地名発祥の碑・赤坂川（跡）

迎賓館から学習院初等科を経て、JR線沿いの、かつては御料地、学習院用地などであった、みなみもと町公園へと向かう。辺りには、現四ツ谷3丁目あたりを源とする赤坂川が流れ、その先は東宮御所内を経て溜池方向へと流れていた。そして鮫川橋が架かっていた。

かつて、ここに紀州藩屋敷（のちに東宮御所）を造営する際に堰を造り、「堰き止め稲荷」が造営されたという。これが転じて「咳止め」の神様になったとか。それはともかく、そのことで、辺り一帯は窪地（現みなみもと町公園）となり排水が不十分になった。大正5年修正の地形図では湿地で表現されていて、その先の赤坂離宮は機密のため白抜き表現になっているから詳細は不明だが、現地地形図の赤坂御用地内を見ると赤坂川を引き継ぐ大きな谷が読み取れる。

JR 線近くには、鮫川橋地名発祥の碑があり、その先には赤坂川跡を表現する蛇行した通りが続く。



湿地となっている鮫川橋あたり（大正 5 年修正 1/10,000 地形図「四ツ谷」）と
鮫川橋地名発祥の碑



赤坂川跡を表現する蛇行した通り（若葉 3 丁目と圓通寺坂）



圓通寺坂近く、藍染院のレンガ塀

⑩西念寺・服部半蔵墓

赤坂川跡の谷にウナギの寝床のように細長く伸びた商店街から、左右の台地の上って各所を訪ねる。通りの東北側には、服部半蔵墓のある西念寺や塙保己一墓の愛染院、南西側には須賀神社や於岩稲荷田宮神社などがあり、いずれをたどるのにも坂道や階段を上り下りすることになる。

服部半蔵は徳川家康に仕え、家康の下で江戸幕府の礎をたてるために間諜として大活躍し信望を得た。そして、家康が江戸に居城を構えた折には邸も与えられ、「半蔵門」として、いまにその名を残している。



服部半蔵墓・三十六歌仙絵が並ぶ須賀神社

⑪ 須賀神社

四谷十八か町の鎮守さまである須賀神社には、三十六歌仙絵が残る。三十六歌仙は平安時代中期に藤原公任が優れた歌人三十六人を選定したことに始まるもので、柿本人麻呂などの平安歌人三人と紀貫之らの平安歌人三十三人からなる。そうした歌人を一人一枚の絵にしたのが三十六歌仙絵で、本神社に残されているのは1836年に完成・奉納されたものである。

⑫ (四谷怪談) 於岩稲荷田宮神社と陽運寺

徳川家御家人の田宮又左衛門の娘於岩（1636年没）と養子となった夫の田宮伊右エ門とは、人もうらやむ仲のいい夫婦であったという。ただし、田宮家の家計は火の車であった。そこで於岩は商家に奉公に出て家計を支え、家を再興させたことから近所でも評判になったという。併せて、屋敷神を信仰していたことから、於岩にあやかろうと、田宮家の屋敷神を「於岩稲荷」として参拝する者が絶えなかったということである。

これを題材に？ 鶴屋南北が「東海道四谷怪談」（1825年初演）としたのだとか。

その後、当地の火事によって於岩稲荷神社は中央区新川の田宮家敷地の移転した（明治12年）が、その後再建。お岩の墓は豊島区巢鴨の妙行寺にある。陽運寺には、由縁の井戸、於岩を描いた絵馬などがある。



於岩稲荷田宮神社と左門町の案内標識

その名も左門町から新宿通りに出たところに「丸正」という名のスーパーがあり、その1階入り口に「お岩水かけ観音」がある。特にここで何かがあったという伝承地ではないが、このスーパーの社屋建設の際（昭和46年）に社長の肝煎りで建立されたいらしい。新宿通りの向こうには消防博物館がある。

そして、いよいよ荒木町へと向かう。

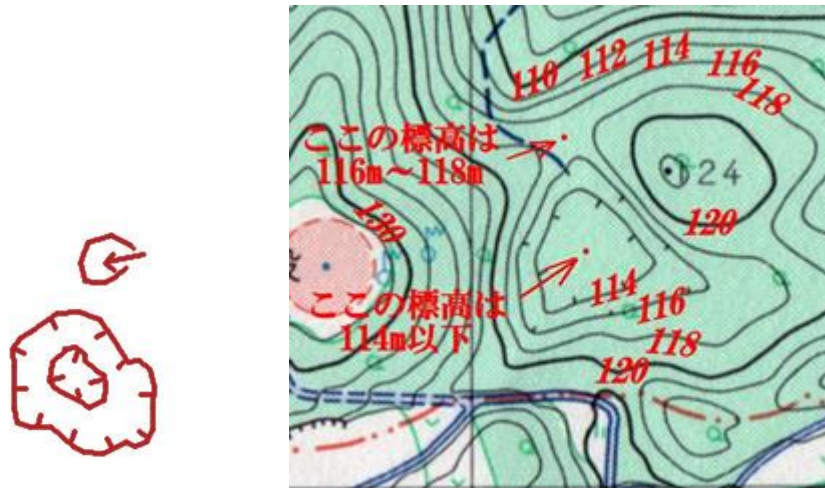
地図豆知識：凹地

凹地とは、周囲に比べて部分的にくぼんでいる地形のこと。いかえるなら、周囲のすべての方向に高くなっている地形。一般には、火山の火口のほかカルスト地形などで多くみられる。

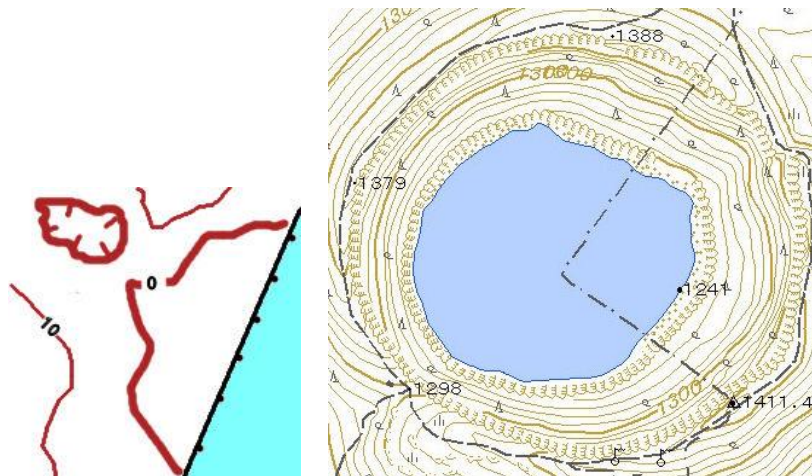
地図上での表現は、凹地の高い方から低い方に矢印をつけるか、短い線を等高線の内側に向けてつけて、凸形になっている通常の等高線と区分する。いずれも等高線に付随して記号があらわされるから、比高差が補助曲線か主曲線間隔より小さい（1/25,000地形図なら補助曲線間隔の5mか、主曲線間隔の10m）ときには表現されない。また、凹地であることが明らかな場合にも、この表現は利用されない。

では、地盤沈下などによって生じた、マイナス標高の地域（ゼロメートル地帯）はどのように表現されるのだろうか。

ゼロメートル地帯は、海面などに接する部分に堤防や防波堤が建築されて、海水の進入などから守られている。この人工構造物を含めれば凹地状である。しかし、工作物を取り除けば、単に海面方向に傾斜のある低い土地ということだから、凹地表現とはしない（と決められている）。人工構造物で遮られた凹地でもいいとすると、盛り土された鉄道や道路、堤防、あるいはダムによって遮られた低地などの類例が考えられて、これを凹地表現すると混乱するからだ。



凹地（大）と（小）・凹地表現の例（1/10,000「秋谷」）



凹地にしないゼロメートル地帯と凹地であることが明らかなため表現が使用されていない
カルデラの例（1/25,000「霧島温泉」）

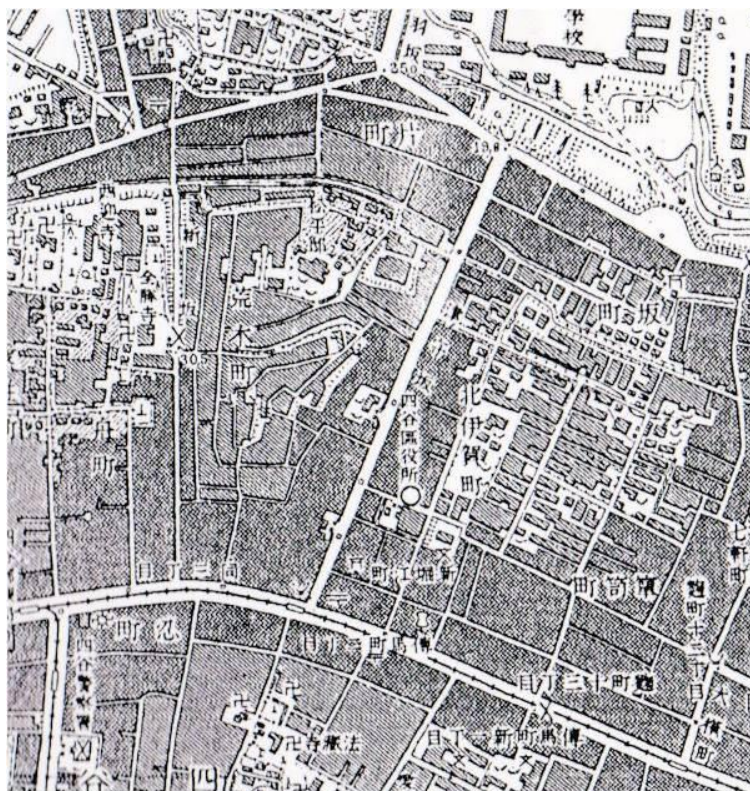
⑬荒木町路地裏と策の池

地図の上でも現地でも特徴的な道路形状や地形を持つ荒木町の窪地には、家康が鷹狩りの際に湧水で汚れを落とすと伝えられる津の守弁財天と策（むち）の池がある。今では池に流れ込んでいた滝も消えて清水の面影はない。

その荒木町あたりは、江戸時代には美濃高須藩主松平家（のちの松平子爵邸：津守邸）の広大な屋敷が存在していた。その広がり、かつて辺り一帯がすべて「西片町10番地」であったことで証明していた。

そして、策の池の窪地は、辺りの湧水を土堤で堰き止めていた名残であるという。凹地のことは、等高線をなぞった地形図やデジタル標高地形図を広げると紙上でも明らかだが、

周辺の数か所の高まりから策の池辺りを眺めると実感できる。注意深く見れば、道路網のことからも推察がつく。

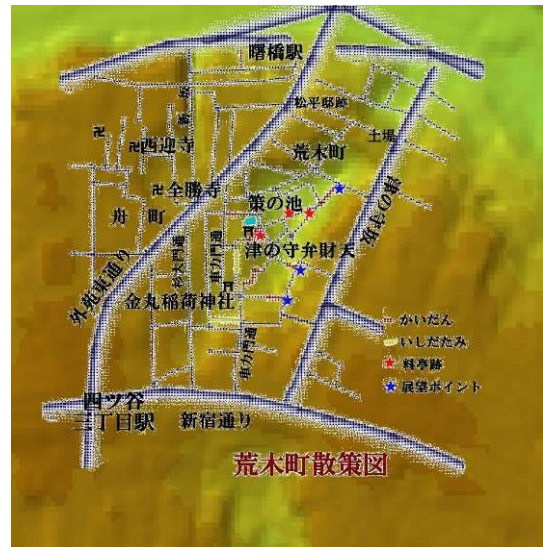


窪地であることで、特徴的な道路網になった荒木町辺り
(大正5年修正 1/10,000 地形図「四ツ谷」)

そして、その庭園の名残を借景にして、明治から大正にかけては芸者が行きかう三業地（料亭・芸者置屋・揚屋（待合）のある所）として賑わった。その面影は、現在も策の池周辺の古びた建物や石畳にわずかに残されている（と思ったら、石畳は都電の敷石を再利用した新しいものらしい）。そして、戦前は市ヶ谷の陸軍士官学校の将校があたりで遊興し、戦後は曙橋にあったフジテレビ関連の業界人で賑わった。策の池から少し上った辺りにある金丸稲荷の玉垣には往時をしのばせる料亭や芸妓屋の刻みに交じって、伊勢丹の刻みも発見できる。

今も多くの飲食店が軒を連ねている荒木町の路地をめぐっていると、底なし沼にでも舞い込んだような気分になる。もちろん、第一級の窪地荒木町は、灯りのともった頃がいい町である。

日中の街歩きの者は、たい焼きの若葉をのぞいて終わりとする。



荒木町散策図（左）とデジタル標高地形図に重ねたもの



荒木町・津の守弁財天近くのかつての面影を残す建物



荒木町の石畳



南の津の守坂方向から荒木町を望む・北の土手から



たい焼きの若葉をのぞいてみる

その他短縮コース

90-2 赤坂・四谷（・赤坂川） その1 (5.0km)

東京メトロ赤坂見附駅→赤坂不動尊→赤坂豊川稲荷→とらや赤坂本店など赤坂商店街→六地藏の浄土寺→赤坂コリアン横丁→日枝神社→赤坂門几号水準点・史跡赤坂御門跡→赤坂プリンスホテル旧館（工事中）→清水谷公園・江戸水道の石柵・大久保公哀悼碑→ホテルニューオータニ日本庭園→弁慶橋ポート乗り場→赤坂見附駅

90-3 (赤坂・) 四谷・赤坂川 その2 (5.0km)

JR 四ツ谷駅→迎賓館前→学習院初等科前→鮫川橋地名発祥の碑・赤坂川（跡）→西念寺服部半蔵墓・愛染院塙保己一墓→圓通寺坂→四谷怪談お岩水かけ観音・消防博物館→荒木町路地裏→策（むち）の池→三栄通り裏→たい焼き若葉→四ツ谷駅

***+ オフィス 地図豆 Yamaoka mitsuharu ***+